カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州のウミスタ文化センター/U'mista Cultural Centre

先住民文化の「フォーラムとしての博物館」

カナダの北西海岸、クワクワカワクゥ（クワキウトル）の人びとのコミュニティのひとつ、アラート・ベイを訪ねた。この地に、ウミスタ文化センターという小さな文化施設がある。巨大博物館に収蔵されていたクワクワカワクゥの「文化遺産の返還」を実現し、その遺産の保存と継承を目的に設立された、コミュニティ・ミュージアムである

返還された仮面の数々の前で繰り広げられる仮面舞踊。着用されているのは、あらたに制作された「変身仮面」（ワタリガラスの面が開くと、人面があらわれる）。ウミスタ文化センターにて

一九二一年、この地の首長、ダン・クランマーは、史上最大規模のポトラッチを主催した。ポトラッチとは、周知のように、出産、結婚、葬儀あるいは首長位への就任といった、人の生涯の節目の機会に踊りの会を催し、その場で家族が所有する財産を披露するとともに、莫大な贈り物を会衆にふるまうという儀式である。

政府が奪った地域の伝統儀式

当時のカナダ政府は、ポトラッチを、富を浪費するだけの「野蛮」な風習として、これを取り締まろうとしていた。ダン・クランマーは逮捕され、釈放と引き換えに、その儀式で用いたすべての財産を政府に譲り渡すことを強いられた。こうして、仮面や彫刻、毛布など、クワクワカワクゥの貴重な文化遺産が政府の手に渡り、オタワのヴィクトリア記念博物館（後の国立人類博物館、現在のカナダ文明博物館）やトロントのロイヤル・オンタリオ博物館におさめられることになった。

蘇る儀式と息づくコミュニティ

クランマーの娘のグロリア・ウェブスターをはじめアラート・ベイの人びとは、一九七〇年代から、接収された文化遺産の返還運動を根強く展開し、一九九〇年ついに返還を実現して、返還された文化遺産の収蔵施設としてウミスタ文化センターを設立した。返還された仮面や彫像はすでに使用に耐えるものではなくなっていた。しかし、このあいだに人びとは自分たちの手で仮面を彫り、毛布を編んで、見事に儀式を復活させている。

ウミスタ文化センターは、現在アラート・ベイのコミュニティのメンバーによって運営されているが、文化遺産の収蔵・展示のための機関というだけでなく、言語教育プログラムや文化伝承のプログラムの実践を通じて、文字通りの地元の「文化のセンター」として機能している。

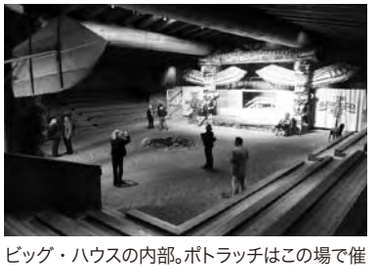
ウミスタ文化センター　アラート・ベイ　ブリティッシュ・コロンビア州　カナダ（以下写真はいずれも、2009年10月撮影）

展示する側とされる側が集う場所

わたしが訪問した際も、カナダ保存研究所（CCI）との共催で、トーテム・ポールの保存のあり方について、保存科学の専門家と、地元の住民やトーテム・ポールの制作に携わるアーティストを交えたワークショップが実施されていた。トーテム・ポールは、ひとたび立てられれば、とくに修理や再着色をおこなうことはなく、朽ちるままにおかれる。必要があればあらたに作り直すというのが、これまでの慣習であった。しかし、先に名前を挙げたグロリア・ウェブスターによれば、近年では、作家としてその名が記憶される人物もみられるようになり、また博物館や美術館の存在も身近なものになって、人びとの考えも徐々に変わってきているという。今回のワークショップも、そうした動きを受けて、先住民族の考えに合致する保存のあり方を探る目的で開催された。博物館と、その展示や収集の対象となる文化の担い手が集い、議論を重ねるなかで、ともにわずかずつでも互いが変わっていく。「フォーラムとしての博物館」のひとつのあり方が、今、このウミスタ文化センターのなかで実現している。

ウミスタ文化センターで開催されたトーテム・ポールの保存に関するワークショップ

アラート・ベイの墓地に立つトーテム・ポール



ビッグ・ハウスの内部。ポトラッチはこの場で催される

吉田（よしだ）憲司（けんじ）
民博 文化資源研究センター

アフリカを中心に、仮面や儀礼、キリスト教の動向についてフィールドワークを続ける一方、ミュージアム（博物館・美術館）における文化の表象のあり方を実践的に追求している。